No.42
2010. 3. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■初心を忘れずに……1
■NEPAL 12年の軌跡……2～3
■日本での経験は、僕の目を大きく開かせてくれた……4
■カンボジア現地訪問報告……4
■最も貧しい地区での収入創出プログラム始まる……5
■ちょっと待って…「援助する前に考えよう」……6
■西スマトラ地震被災地復興支援報告……6
■「コンビニ通い」の大仏まつり……6
■講演会「未来への投資」を聞いて……7
■活動日誌……7
■INFORMATION……8

初心を忘れずに

理事　松本陽子

地球の木は、「ランチ１食分を海外支援に」と発足してもうすぐ19年になります。1991年７月３日に横浜市開港記念会館で設立総会が行われました。設立趣意書には、ベルリンの壁の崩壊により平和が展望できる時代の訪れを感じた矢先に湾岸戦争によって多くの命が失われたことがのべられていました。平和への脅威のみならず、貧困、環境破壊、人権侵害は改善されるどころか年々悪化しており、これが地球そのものの破壊、そして子どもたちの将来を脅かすことになることを警告しています。この日、地球の木は、女性、子ども、少数民族など弱い立場の人たちの自立支援を目的に発足したのです。

設立当初は支援先を探すのも、日本国際ボランティアセンター（JVC）や草の根援助運動など先輩NGOの情報を頼りに決めていきました。JVCの案内で、借金地獄に苦しむ農民のいるタイ東北部を視察したり、外国資本のまだ入っていない素朴でゆったりとしたラオスの森も訪れました。

ネグロス島のバランゴンバナナの生産地を訪れる機会もありました。バナナの収穫の様子や、バナナだけに頼らず、家庭菜園をして自給しようとしている様子も見てきました。

現在の、地球の木の活動は、現地のNGOと直接に連絡を取り合いながら行うプログラムが増えました。その第一号はネパールの識字教育でした。多くの苦労や失敗もありましたが、途上国に生きる人たちの思いや、女性たちの隠れたパワーを交流を通じて直に知ることができました。

本当に必要な支援とは、豊かな国の人が貧しい国の人へ一方的に援助をすることではないと思います。日本は人口では2%にしかすぎないのに、世界の穀物の10%を消費し、熱帯雨林の材木の輸入量は、熱帯材の世界貿易の約20%を占めています。私たちは南の国の人たちによって生かされています。自らの生活を見直し、生活を変えることを考えつつ、地域住民どうしの交流を深め、お互いに学びあうことが大切なことではないでしょうか。

アジア学院にて農業の体験
前列中央が筆者

今年度、「プロジェクト連絡会」が発足しました。これまでのプロジェクトの中で現地の人たちと学び合った経験を活かし、地球の木独自の国際協力のあり方を話し合っています。連絡会主催の学習会として、「援助する前に考えよう」というワークショップを行いました。「援助とは何か」「国際協力とは何をすることか」を学びました。「援助する側」や「される側」の心理にまで立ち返って、援助や国際協力について考えさせられました。現場では、「慈善型」の援助や「技術移転型」の援助に代わって、住民参加を基本とした「参加型開発」の援助が主流となりつつあります。私たちも「外部者」としてのあり方をしっかりと見つめていくことを決めました。

地球の木は現在、「ラオス森林保全・自然農業」「カンボジア職業訓練センター支援」「ネパール幸せ分かち合いムーブメント」の３つの海外支援プロジェクトを行っています。さらに新しいプロジェクトも検討している今、設立当時の初心を忘れず、時代に即したよりよい支援のあり方を探りつつ、実行していきたいものです。

今年度理事となり、海外プロジェクトを担当している松本さんは、地球の木設立当初からの会員であり、運営委員やブランチの代表などとしてずっと地球の木の活動に関わっています。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

ネパール教育支援12年の軌跡

動乱の中に咲いた花

1997年、地球の木のなんぶ[*1]ブランチから始まったネパール教育支援プロジェクトは、内戦など未曾有の非常事態に見舞われながら、昨年、予想をはるかに超える大きな成果をもって終了することができました。同プロジェクトを12年間に渡って支え続けて下さった会員の皆様はじめ多くの方々に心から感謝いたします。

それは10クラスの識字教室から始まった

1994年7月、NGOリーダー研修で来日していたニルマラK.C.さんが、日本の女性たちの活動を見たいと生活クラブ生協を訪問。その時、受け皿になったのが、地球の木なんぶブランチでした。ニルマラさんとの出会いでネパールの教育の現状を知ったなんぶの会員たちが「私たちにも何かできないだろうか」と思い立ち、1996年11月、現地を訪問しました。ニルマラさんが識字教室や職業トレーニングなどを実施していた極西部に案内され、そこで見たものは、教育を受けた女性たちの自信に溢れた姿でした。識字教室の実施された村は、他の村々よりも清潔で、村人たちの瞳の輝きが違っており、教育の及ぼす影響を目の当たりにしました。なんぶの決めた「女性が対象で、最も必要とされる、少額でできる支援」という方針にぴったりでしたので、翌1997年2月、10クラスの識字教室がスタートしました。

地域に広がった識字教室

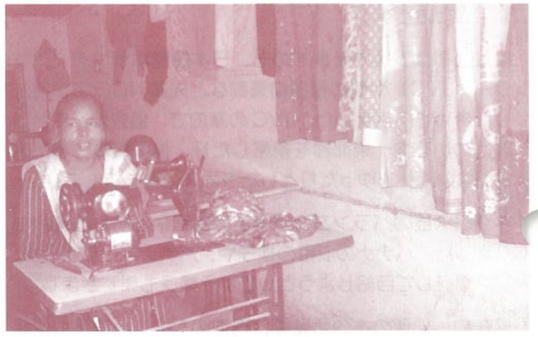
識字教室に参加した女性たちは意欲的に学習し、学んだことをどんどん行動に移しました。助け合いのための貯蓄グループを作ったり、植林をするなど生活の向上に積極的に取り組むようになりました。周辺の村々から「うちの村でも識字教室をやってほしい」という要望が出て、合計81クラス、延べ2,000人を超す村人たちが識字教室に参加し、成人識字率100パーセントの村も誕生しました。

職業トレーニングも

勉強するだけでなく収入を得られるようになりたいという声が村の女性たちから出ました。話し合いの結果、裁縫、農業、畜産などのトレーニングを実施しました。地球の木の支援した少額融資から資金を借りるなどして、裁縫教室からは6名の女性たちが仕立屋を経営するようになり、後輩を育てる人も出てきました。季節外の野菜を作って収入を増やした人、豚の飼育に成功して子どもたちを学校に行かせ、農地も買ったと嬉しそうに語る女性にも会いました。

活動拠点をイマドール村に移動

1996年頃から次第に勢力を伸ばした反政府組織「マオイスト」と政府軍との武力闘争は年々激しさを増し、2001年11月にはネパール全土に非常事態宣言が発令されました。識字教室などの活動が続けられなくなっただけでなく、極西部に行くことも連絡を取り合うこともできません。現地NGOのSOARS[*2]と協議の結果、活動拠点をニルマラさんの住むカトマンズ近郊のイマドール村に移し、内戦で弱体化したNGOの強化や女性、若者たちのグループ育成に重点を置くことになりました。これは低迷していた活動を活性化しただけでなく、波及効果を生みました。ユースクラブの活動は、地球の木が行った「YOUTH交流スタディツアー」を機に、日本からの青年たち、極西部から招いた青年たちにも大きな影響を与えました。極西部に2つのユースクラブが誕生し、今も地域の問題解決に主体的に取り組んでいます。



仕立て屋を経営するアサさん

内戦の中、活動は脈々と続いていた！

2003年、事態が収拾し、私たちは3年ぶりに極西部まで調査に行くことができました。外出禁止令が解除されると、貯蓄グループのメンバーたちは、手に手に10ルピー(当時16円)を持って集まり、貯蓄を続けていました。2年間休止していた識字教室も、2003年に再開されました。他のNGOがマオイストの妨害を恐れて撤退する中、極西部のSOARSメンバーたち、村人たちは活動を続けていたのです。

＊1　なんぶブランチ：地球の木は神奈川県内の11のブランチから成り立っている。なんぶは横浜南部の地域。

＊2　SOARS：ネパールのNGOでニルマラさんが代表。農民たちを貧困から立ち上がらせることを目標に、意識改革、地域づくりから社会・経済的発展を進めている。

豚の飼育に成功した女性

民主化にも協力

政情は再び混迷を極め、2005年2月、国王が全権を掌握するという最悪の事態が発生しました。言論統制、集会の禁止など市民活動への締め付けが厳しくなるにつれ、民主化のうねりは高まり、2006年4月、数万人の市民が王制廃止を求める抗議行動にでました。国王はやむなく権力を議会に移譲し、新憲法を制定するための選挙が行われることになりました。ところが、市民グループのリーダーたちですら、選挙や憲法、民主主義が何を意味するのかを知りません。彼らからの強い要望に応え、予定していた識字教室に替えて制憲議会選挙のための勉強会を行うことになりました。まず、リーダーたちを対象とした勉強会をし、各々が自分の村に帰って村人たちを対象とした勉強会を行うのです。その結果、極西部カイラリ郡で投票に行った人は、男性よりも女性の方が多かったそうです。ネパールは2008年、王国から連邦共和国になりましたが、地球の木の支援も民主化に少し貢献できたのではないでしょうか。

デブラニ(中央)デブラニの先生(右)と生徒(左)

若者は育ち、歴史は繰り返す

12年間支援に携わってきて感じたこと、それは、若者は育ち、歴史は繰り返すということです。初めて会った時、小学生だった子どもたちが10年後には大学生になって、ニルマラさんに習いユースクラブのリーダーとして活躍しています。識字教室を卒業して進学し先生になったデブラニの教え子たちも、「先生になって、地域の人たちに貢献しなさい」というデブラニ先生からの教えを守って、識字教室で教えています。

顔の見える、心の通い合った支援

「地球の木の支援は、ODAなどに比べると少額だが、顔の見える、心の通い合った支援です」と2003年の評価調査の時、SOARSのメンバーたちが言ってくれました。私たちは毎年現地を訪れ、相互理解を深めながらプログラムを進めてきました。念願だった協同組合ができたのも、生活クラブの活動に関わってきたネパールチームのメンバーたちが、協同組合の良さを伝えてきたからだと思います。そして、私たちの月々500円の会費が、支援に当てられていることを強調し、納得できないことがあると、とことん議論しながら村の人々が最も必要とする支援を目指して協働してきました。

支援終了後を見据えて

支援が終了に近づいた2007年からの2年間は、地球の木が去った後も人々が活動を続けていくことができるように、戦略的計画の立て方、ネットワークの仕方、助成金申請や報告書の書き方トレーニングなどを行いました。2008年の調査の時、きれいな水の出る井戸やトイレ作りに奔走する女性リーダー、美しい森の村を観光地にと考えるリーダーたち、ソーラー事業を立ち上げたいと熱く語る協同組合員たちに出会い、ネパールの未来は明るいと思いました。

課題も……
失敗を新しい支援に活かす

うまくいったことばかりではありませんでした。最初は、最も弱い立場にある人々の支援を考えていましたが、実際にやってみると、初めから最貧層に支援をするのは難しく、徐々に浸透させていかなければならないということが分かりました。

極西部は「陸の孤島」と言われ、「援助」から置き去りにされた地域でしたので、やりがいがあった反面、カトマンズから遠いので、現地に行くには時間がかかり、情報も入りにくかったというマイナス面がありました。

地球の木はハコモノの支援をしないというスタンスでしたが、村人たちからの要請があり、地球の木のNPO法人取得の記念にと、極西部のコミュニティセンター建設を支援しました。しかし、現地を訪ねてみると、あまり使われている様子がなかったり、政府に貸し出されていたりで、やはりハコモノ支援は難しいと感じました。

少額の支援にしては費用対効果が大きかったのですが、SOARSに十分な人件費を出すことができなかったため、専従スタッフを置くことができず、報告書がなかなか届かないで、はらはらしたことが多々ありました。これら反省点を踏まえ、新たな支援の参考として、これからもよりよい活動を展開していきたいと考えています。

（ネパールSOARSチーム　乳井京子）

識字教室の先生になったデブラニの生徒たちや村人たち

ネパール教育支援プロジェクトに関する詳細を知りたい方は、ネパール教育支援プロジェクト終了報告書「12年間の軌跡」をお求め下さい(一部500円、事務所にて販売)。

from Cambodia

カンボジア現地訪問
少しずつ自信をつけていく少女たち

2月12日から17日まで、カンボジア（プノンペン・タケオ）を訪れた。年に二度の訪問だが、驚く速さで街は開発されている。交差点には信号がどんどん増え、次々と高層建築が増えている。前回、最新だった近代的なデパートも今は二番手になってしまったという。カンボジアのお正月は4月だが、小さなお店から近代的なビルの銀行までもが入り口に赤い提灯をぶら下げ、獅子舞があちこち練り歩く旧正月の街の様子は、まさに華僑が経済を握るカンボジアを象徴している。

「私が作ったブックカバーです」

タケオの職業訓練センターでは、先生・少女たちが元気に私たちを出迎えてくれた。注文したシルク小物は一部をのぞき、できあがっていた。電気がなく、アイロンといえば「炭アイロン」。接着心を貼り付けたり、仕上がりをきれいにするために、そして縫いやすくするためにアイロンは欠かせないが、準備するだけでも火おこしからはじめなければならない。それだけで一苦労だ。さらにミシンも調子がいいとはいえない。十分とはいえない環境の中でも、精一杯がんばって作ってくれているようだ。

今回サンプルとして発注していた伝統的な絣模様のシルクスカーフは3回目ということもあって、まずまずの仕上がりだった。こちらの注文分とは別に、先生が自分でデザインを工夫して作ったという新作も見せてくれたが、とても素敵なものに仕上がっていた。ますます積極的に「売れるもの」を作ろうとする意欲がうかがえる。スカーフ・シルク小物の双方に言えることだが、仕上がりに関してもできの悪いものはかなり少なくなった。「傷モノ」をより分けるということもするようになった。「困難な環境にいる少女たちの支援になる」からといって、いい加減な物作りをしてもいいということではない。丁寧な物作りをすることの大切さを理解してもらうことが、これからのセンター自立へとつながっていくのだ。うれしそうに自分たちの作品を見せる彼女たちの笑顔を見ながら、これまで細かくアドバイスしてきたことが少しずつ彼女たちに浸透していることを確認できた。

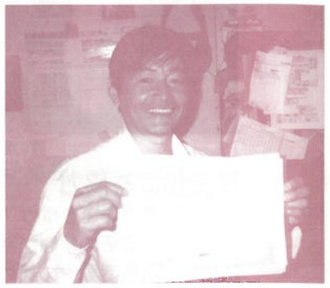
（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

炭アイロンを使って指導するクメールシルクチームの大薮さん

※出来上がった製品は、3/28(日)の地球の木カフェ「カンボジアスペシャル」にて販売します。

from Laos

「日本での経験は、僕の目を大きく開かせてくれた」


修了証をうれしそうに見せてくれた

JVCラオスの現地農業スタッフであるフンパンさんは、9ヵ月間の日本のアジア学院での農業研修を終え、12月中旬帰国した。今回の支援について振り返ってみたい。

現在地球の木が行っているJVCを通じてのラオスの村支援という間接的な支援形態は、実際、村でどのように役立っているのか、現地を訪問したメンバーはともかく、一般の会員の方にはもうひとつ見えにくいところがあるのではないだろうか。そんな中で今回は、フンパンさんの研修費用の一部を支援するというかなりわかりやすい形であった。このような“人”に対しての支援は、フンパンさんという顔の見えるところから、直接手ごたえのある成果を感じることができたし、またラオスに対する親近感も格段に深まったように思われる。

ラオスチームではできるだけ交流の機会を持ちながら応援したいと考え、彼の滞在中、3度ほど会う機会を持った。秋には地球の木のメンバー7人でアジア学院に彼を訪ね、彼の学びの一端をこの目で見、初めての稲刈りをフンパンさんの指導の下に体験して楽しいひとときを持った。また私たちにとっても食について考えるいい交流であった。

帰国直前の報告会は、狭い地球の木事務所が一杯となるほど盛況だった。「日本での経験は、私の目と耳を開かせてくれた。こういった貴重な機会を支援してくださってありがとうございました」とフンパンさん。アジア学院では、有機農業の技術ばかりでなく、リーダーシップについて、タイムマネージメントについて、また自らの内面に向き合う‘内観’など多くのことを学んだと語った。世界19ヵ国からの研修生と9ヵ月間を共に過ごし、寮を出発するときは互いに涙を流しての別れだったという。

ラオスに戻ってからのフンパンさんの夢としては、ラオスの村人が、現在では年に数か月分足りない米などの食糧を完全に自給出来るようになることだそうだ。他にも鶏や豚、牛などを病気にさせない飼育方法も実践したいと語る彼は、以前と比べて堂々と自信に溢れ、また英語力もパソコンを使ったプレゼンテーションも、目を見張るような上達ぶりだった。穏やかな性格でしかも勤勉なフンパンさんの努力がしのばれる。これからのラオスについても、「トラックが荷台に人を乗せて走るとき、車のスピードが緩やかなら、荷台の人は安心して乗っていられるが、車のスピードが速すぎた場合、荷台に乗っている人は振り落とされてしまう。これからの開発や発展が、ラオスの人々が振り落とされないような速度であってほしい」と、うまい比喩を使って話してくれた。

帰国後は、彼を核としてさらに多くのリーダーが育っていくに違いない。参加者はみな、「こういう支援っていいね」と、誰からともなくうなずき合ったのだった。

（ラオスチーム　中野真理子）

from Nepal

最も貧しい地区での収入創出プログラム始まる

高校生と村人の行った開発に関する基礎データ調査によると、9地区からなるマンガルタール村では、約半数の世帯が経常的な収入がなく、また1年のうち6ヵ月分の食料しか自給できません。土地を所有していない、ふもとから遠いなどいくつかの理由がありますが、その中でもラジャバス集落は、ふもとから最も遠く、貧しい世帯が64%を占めています。そのため子どもの就学率も39%しかなく、残りは未就学、あるいは中途退学となっています。調査結果を見れば、どの地区で収入創出プログラムを最初に行う必要があるかが、読み取れるので、カトマンズのNGO「S-AGUN」と地球の木のネパールチームは、当初ラジャバス集落での収入創出プログラムの計画を立てていました。しかし村の委員会が、9地区公平にトレーニングを行うことを希望したので、村の希望を尊重し、2008年度は各地区で選ばれた9世帯に、野菜栽培のトレーニングを行い、成果が出ました。

そして、2009年度は、いよいよラジャバス集落内でのプログラムが始まりました。まずラジャバス集落で農業委員会が発足し、その後、委員と村人による参加型の状況調査を行いました。地面に石などを使って、地域マップを作ることによって、どんな資源があり、改善の余地はどこなのか、どの世帯が収入創出のトレーニングを受けたらよいか、ということを村人が客観的にとらえることができます。その結果、農業委員会が村人と行う公正な会合で11世帯が選ばれました。今後、少額の融資とトレーニングを受けることになります。

「SAGUN」のサルバジット氏と、元奨学生のラムシン君が、コーディネーターとして活躍しています。現地学生の足で往復6時間の勾配のきつい山道は、日本人には倍近くの時間がかかるだろうと思われます。次回訪問までには、足腰鍛えて臨み、現地報告をしたいと思います。

（ネパールチーム　岸　夏代）

石や木の枝を使って地域マップを地面に作る村人たち

ちょっと待って!……「援助する前に考えよう」

「ここはタイの東北部、少数民族が自給自足の生活を営んでいるバーン村。最近流行のトレッキングツアーでやって来たあなたは、村の小学校に立つ看板に目をとめます。そこには英語で、『この村の学校はお金がなくて困っています。あなたの寄付があれば、もっと子どもたちに教材や道具を買ってあげられます。どうかあなたの10ドルをこの学校のために寄付してください。アイコ・ナカムラ』と書いてありました。さあ、あなたは寄付しますか?」。昨年11月14日、こんな問いかけでワークショップが始まりました。

今年度から、各プロジェクトがバラバラに活動するのではなく、地球の木のプロジェクトのあるべき姿を常に確かめながらやっていこうと「プロジェクト連絡会」が発足しました。そこでは、今ある地球の木のプロジェクトをあらゆる角度から検証し、また新しいプロジェクトを模索するという、難しいテーマで話し合いが持たれています。そこでまず自分たちが勉強するために、各プロジェクト・チーム・ブランチで活動している方々に集まっていただき、『援助する前に考えよう』というワークショップを開催しました。講師はこのワークショップの制作者、開発教育協会(DEAR)前代表理事の田中治彦氏です。(私も、この開発教育教材「援助する前に考えよう」の企画編集委員の一員です)。

まず直感で「私は寄付する・しない」を発表します。そしてアイコの活動に賛成か反対か、それはなぜか、よりよい活動になるためにはどうしたらいいのか話し合います。「村のニーズを把握すべき」という意見が出ると、今度は、アイコや村長、長老たちに扮して話し合う「ロールプレイ」を行います。ところが、大多数の村人役はそれを見ているだけで何も言えません。「ニーズ調査」がいったい誰のニーズを調べているのか体験することになるのです。最後に田中氏から、国際開発援助の「参加型開発」と、「PRA(参加型農村調査法)」について解説がありました。「PRA」は、地球の木の「しあわせ分かち合いムーブメント」でも行われているものです。参加者からも、「あらためて地球の木の活動の方向性を確かめることができた」「地球の木に関わっている人たちで、こういう学びの機会をぜひまた持ちたい」という感想が多く寄せられました。みなさんも、それぞれのブランチなどでの企画にぜひ一度参加してみてください。

(プロジェクト連絡会担当理事　斎藤　聖)

西スマトラ地震：被災地復興支援報告

ヤギの飼育プロジェクトはじまる

2009年9月30日インドネシア西スマトラ州パダン・パリアマン県を襲ったマグニチュード7.6の地震は大きな被害をもたらしました。地球の木は、日本インドネシアNGOネットワーク(JANNI)を通じて、現地NGOキバール(Qbar)がおこなう復興支援「被災農村でのヤギ飼育プロジェクト」へ緊急救援金及び募金(10万円)を送金しました。パダン・パリアマン県では、地震後の地滑りで田畑が崩壊し、農民たちは生活の糧を無くした状態でした。ヤギは成長が早く、投資した分の回収を早くおこなうことができるので、援助への依存から早く脱却し、早く生活再建をおこないたいという農民の希望に応えての支援です。第1回目の送金でヤギ30頭が購入され、10匹ずつ、3つの農民グループに配布されました。JANNIのメンバーによる1月下旬の現地モニタリングでは、「ヤギは順調に飼育されていて、すでに妊娠しているヤギもいる。またその糞は畑のよい肥料にもなっている。今後はヤギの乳の販売も進める予定」とのこと。一日も早い復興を願っています。皆さまご協力ありがとうございました。

(事務局長　筒井由紀子)

ヤギの引き渡し

「コンビニ通い」の大仏まつり

昨年の11月22日、朝から空はどんよりと曇り、寒い1日であった。こんな日に人が来てくれるのだろうかと思いつつ、祭の会場へと自転車を走らせた。鎌倉といえば「大仏」、「大仏」といえば「長谷の高徳院」。そこで、鎌倉のNPO団体が中心となり、恒例の「かまくら国際交流フェティバル」が開催されている。地球の木「三浦ブランチ」では、毎年その祭で支援先のパネル展示や物品販売を行っている。あいにくの天気のこの日でも、案に相違して訪れる人が多かった。ところでなんで「コンビニ通い」なのかといえば、こんな「サミー」日は、だれもが温かい「ラオスコーヒーでも飲みたいな」と思ってしまうのだ。用意した紙コップはまたたく間になくなり、紙コップ買い出しのため3回もコンビニまで往復することになった。〆てコーヒー約200杯。

(三浦ブランチ　米林大作)

講演会「未来への投資」を聞いて

地球の木講座2009として田中優さんの講演会が2月6日に開かれた。田中さんは“未来への投資”ということを主に「お金の使い方」について、自分の活動を含めて話を始めた。

田中さんは、お金を自分たちで出資して、自分たちが必要と思うところに貸し出していく非営利のバンク「未来バンク」を15年前に設立。現在、全国で20ぐらいのNPOバンクができている。これは、地域分散化のお金の流れができたということになる。さらに私たちはエネルギーとして、世界共通の資源である石油を使っているが、今後はそれも地球規模で地域分散化されなければならないと話し、ピークオイルの問題から次々と語った。1980年以降大きな油田は見つかっていない中で、石油の消費量は世界全体でどんどん伸びている。消費が増えているのに石油の生産量がピークを迎えてだんだん下がり始めている時期を、田中さんはガソリン価格が200円に上がった2008年のオイルショックの時だと見る。石油不足はもう始まっているわけだ。その石油の奪い合いが、戦争をつくっていること。戦争や紛争は石油や天然ガス、鉱物資源、水が豊かなところ、パイプラインが通っているところで起きていること。その上、このまま化石燃料を燃やし続ければ地球温暖化で未来はないこと。そのためにも、自然エネルギーに向かわざるを得ないことなどに言及した。

私たちが、郵貯や銀行に預けたお金は、年金や簡易保険、農協のお金などと共に、中央に集められ、中央が使い道を決める。地方のお金が、地方のために使われずに、無駄な公共事業や、ODA、IMF、世銀を通して途上国への貸し出し、そしてアメリカ国債を買うためにも使われている。この貸付金が、最貧国を、金利が金利を生む借金地獄に陥れている。また日本が買ったアメリカ国債の額が、イラク戦争の戦費に匹敵すると聞き、意図していないのに、私たちの預金が、貧しい国を苦しめ戦争に荷担していると知った

地域の活性化にはお金が必要。地域経済は地域のお金の量とお金の回転数で決まり、地域を活性化するためには自分たちのお金をその地域で回す仕組みを作ることが必要とのこと。そのためにもNPOバンクだけでなく地域の信用金庫や信用組合などの選択肢もあることが話された。例として非営利の天然住宅を建てる会社を設立し、国産の木材で安全で、エコな住宅を造ることが、日本の林業を守り、自然をも守ることが出来ることを挙げた。大事なことは、目先の損得を考えずに長い目で見て、未来が豊かになる形でお金を使うことが必要など精力的な説明があり、2時間の講演会を終えた。

(湘南ブランチ　坂下まさみ)

活動日誌(12月～2010年2月抜粋)

12月 1日　代表者会議
10日　第8回理事会
14日　フンパンさんアジア学院終了報告会(ラオスチーム)
16日　地球の木カフェ　地球の木サロン「Tea&Talk」
17日　地球の木サロン「エッセイ修行」「実践英会話」
19日　ネパールスタディツアー第1回説明会
地球の木サロン「ハングルに親しむ」
21日　第7回ブランチ連絡会　プロジェクト連絡会
24日　プロジェクト連絡会　年末大掃除

1月 5日　仕事初め
7日　地球の木サロン「実践英会話」
12日　第9回理事会
14日　出前講座(港北高校)
20日　地球の木サロン「Tea&Talk」
22日　第8回ブランチ連絡会
23日　地球の木サロン「エッセイ修行」
24日　リコー社会貢献クラブ10周年記念講演会参加
ネパールスタディツアー第2回説明会
30日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」

2月 3日　事務所訪問　東京女学館中学4名
4日　地球の木サロン「実践英会話」
6日　田中優…未来への投資講演会(万国橋会議センター)
8日　ATJバナナ追熟ムロとパッキングセンター見学
11日　カマルさんワークショップ(藤沢六会地区)
12~17日　カンボジア調査
13日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
13~21日　ラオス調査
15~19日　地球の木活動パネル展示　(市庁舎ホール)
17日　地球の木サロン「Tea&Talk」
18日　地球の木サロン「実践英会話」
23日　第10回理事会
24日　第9回ブランチ連絡会、
ワークショップ「援助する前に考えよう」
26日　出前講座「マジカルバナナ」(上尾市立大石中学校)
28日　ネパールスタディツアー学習会(サポートセンター)

第11回総会のお知らせ

日　時:5月29日(土)13:30～15:30　議事審議
15:30～16:45　チャイ・デ・トーク
「もっと話そう地球の木」
場　所:オルタナティブ生活館2階「オルタリアン」(JR新横浜駅下車徒歩7分)
※ 詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。

ハイチ大地震復興支援募金のお願い

子どもたちに笑顔を、地域の人々に生活再建の足がかりを

地球の木は、現地とつながりを持つ神奈川県のNGOを通じて支援を行う「かながわ復興支援ネットワーク」の「ハイチ大地震教育復興支援プロジェクト」に参加しています。

「ハイチの会セスラ」を通して、貧困層の子どもたちが学ぶ学校を支援します。学校が再開することにより、子どもたちが希望を取り戻し、地域の人たちが助け合う拠点となります。

ハイチの会セスラ：ハイチの貧しい子どもたちを、政治や宗教にこだわることなく心から支援することを目的に活動。公教育を受けられない子どもたちと地域の発展を支援している。

募金振込先：郵便振替口座　00260-5-14129
(特活) 地球の木
「ハイチ」とお書きください。
※会員の方は、同封の郵便払込票をご利用ください

オープンオフィス地球の木カフェ カンボジア　スペシャル

日　時:3月28日(日)11:00～16:00
現地訪問報告「タケオ訓練センターの3年間」
13:30～14:30
場　所:地球の木事務所

春色を事務所一杯に飾り、訓練センターで製作されたカンボジアシルクの小物と手織りのシルクスカーフの展示販売会をいたします。2/12～17日に訪問した訓練センターの報告もあります。　おいしいお茶、手づくりのお菓子もご用意しています。

未使用切手、書き損じハガキがありましたらご寄付ください

年賀状の整理はお済みですか？印刷ミスや書き損じで未投函のハガキがありましたら地球の木へご寄付ください。また、引き出しの中に眠っている未使用切手もありましたらお送り願います。

年末募金キャンペーン2009報告

皆さまのあたたかいお志をありがとうございました。

■ ネパール・マンガルタール「幸せ分かち合い募金」	49,400円
■森の国ラオス「村びと支援募金」	42,200円
■カンボジア・タケオ州職業訓練センター「夢織り募金」	41,200円
■指定なし	227,500円
■合　計	360,300円

DEAR「教材体験FESTA2010」

地域や学校で使える教材がたくさん体験できるチャンスです。26種類、のべ30回の参加型ワークショップが実施されます。地球の木もふたつのコマで参加します。

日　時:3月27日(土)～28日(日)各日10:00～18:00
1日目:13:30～15:30 マジカルバナナ
2日目:16:00～18:00 援助する前に考えよう
場　所:東京YMCA社会体育・保育専門学校
(地下鉄東西線「東陽町」駅より徒3分)
主　催:特定非営利活動法人 開発教育協会
参加費:2日間8,000円、1日4,000円
申し込み:直接開発教育協会へ
TEL 03-5844-3630　FAX 03-3818-5940
URL http://www.dear.or.jp/index.html

報告会「ラオス調査と森の交流」

ラオスの新しい支援地サワナケートへ調査に行ってきました。現地報告と共に村人との交流や森の様子をみなさんにお伝えします。絵本作家　田島征三さんも同行しました。田島さんの見たラオスの話も聞けます。

日　時:4月10日(土)13:30～15:30
場　所:横浜中央YMCA 9階チャペル
(JR・市営地下鉄関内駅下車徒歩3分
みなとみらい線日本大通り下車徒歩5分)
資料代:300円

カレンダー報告

地球の木カレンダー2010「子どもたちの大地」は、みなさまのご協力のおかげで、完売いたしました。(1,250部)
収益は地球の木の各プロジェクトに使わせていただきます。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

PRINTED WITH SOY INK™
環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています